

郷土人物の取扱いに關するアンケート
を通じてみたる

社会科教師の意識

服 部 良 一

標記の調査は、昭和三十三年冬季の休暇中の課題として、主として社会科教育法、教材研究並びに再門の西洋史概説等の私の聴講学生に命じて、県下小・中学校の社会科主任に面接したレポートを一応まとめたものである。訪向校は学生の偏省中の郷里に近いところというので、彼等の出身が比較的北・中勢に偏り、伊賀、南勢、紀州方面が乏しい嫌いがないでもないが、県下小・中校合計約六〇〇校、そのうち、学生の訪向校は「小学校五九校」「中学校五四校」計一一三校で他に「愛知・岐阜・他県が一八校」あった。とも角、六〇〇校足らずの県下の小・中校のうち約二〇％の学校訪問区したことは、かなり信頼度の高い調査ができたのではないかと思う。

- アンケートの項目は、次の四項目である。すなわち、
1. 三重県下の郷土人物で、社会科教育上望ましい人物として挙げるに足るものがありますか。(人員無制限)
 2. 郷土人物でこんなのはどうかと思われる人物(社会科教育上余り好ましくないとと思われる人物)があれば誰か、又

は、どんな傾向の人物ですか。

3. 地域(郡市単位程度)の人物で、県下全般には余り知られていないが、地域の社会科教育上推すに足るものがあるばその人名、略伝、又は資料を教示下さい。
4. 社会科教育で、人物をとり上げるについての御意見承わりたい。

この調査の結果を概括してみると、次のようなことが大体言えそうである。

1. 一般に社会科教師の歴史的意識の程度は高い。すなわち学生の質問に対し、各学校の教師たちは解答に頗る良心的で、慎重である。各学校の社会科主任は、即興的な思いつきさのべるのではなく、一旦猶余を求め、次回に回答している場合も相当数あり、又、なかにはストロフの傍で、アンケートに対して、青年教師と相当年輩教師との意見の差が、相当の討論をまき起しながら回答されている。こうした場合でも、一般的に教師達の歴史的意識乃至歴史理解は鋭いと言うべきである。

2. 一般に社会科学習に於て人物を採り上げる点には賛成を示している。道徳教育との関連に於ても人物を採り上げることに賛成の向もあるが、一般には孤立した人物として扱われることに不安を示し、人物はあくまで、歴史的・社会的関連の下に取扱われるべきを強調しているのは当然の要請であろう。戦前の歴史教育の善玉、悪玉主義の一面性の弊に再び陥ることを警戒しているのである。

3. 社会科教育上、望ましからざる郷土人物は誰か? という趣向には一般には無解答か、又は逆にこれは悪向であると決め

つける向もあつて、概して関心が乏がつたようである。つまり人物が歴史的社会的必然的発展の所産なのだから、好ましくいか好ましくないなどというのはおかしいという議論である。一面なるほどその通りなのだが、私は社会科教育という立場と歴史教育という立場には若干ニュアンスの違いもあると思ふし、この傾向の立場は充分成立つと思ふし、こうした解答には全面的には賛成しかねる。それについては又あとで述べるとして、この項目の解答に「封建的道德を助長するような人物を取扱うのは好ましくない」という意見があつたり、又「現場の社会科教師が学生に回付した紙に、「荒木又右衛門」の名を一だんあけて、又それが消去してあつた」という報告などは、うなづかせる点がある。

4. 以上のことから一般に計画性のある人物指導が、充分に行われていない反証として指摘されよう。例外的には郷土人物を小学校3年、4年にそれぞれカリキュラムにとり入れようとしていたものに、上野市教委編の社会科資料などもあるが、こうした人物指導が、実際にあまりとり上げられていないのは適切な「郷土人物資料集」といつたものも編まれていないことなどもあり、現場が関心を持つていても充分指導できない悩みがあること、また今の單元を流してそれに関連する郷土人物の名を挿入するのが関の山で、指導の時間的余裕もないといったものがあるようである。小学校では中学校よりも一層「郷土人物」といつたものに関心を示しているのは、小学校3・4年が「郷土」を社会科学習の主題としている点に、基づくからである。

5. さて、郷土人物を挙げて貰つたわけだが、沖1向の県下、又才3向の都市程度の大小郷土人は113校で推薦した合計人数は378名に達した。推薦数の順位でこれらの郷土人物のうち70名を並べてみると下記のようになるのである。すなわち、御本平早吉を76校が推し、尾崎行雄、本居宣長等は70校以上が推しているが、その他松尾芭蕉、河村瑞軒、角屋七郎兵衛等がこれについている。一般に郷土人物として挙げられた者は郷土のゆかりの産物、交通貢賦などの功績者な多かつたのは、今日の傾向として概ね妥当である。興味があつたのは他域的に人物の類型が見られることで、例えは四日市市方面を中心として北勢には、万古焼につくした人々が、山田を中心として参宮のために道路をひらいたり修築したりした人々が輩出しているといつた傾向である。人物を類型として見るといつたことでは、いわゆる伊勢商人の放胆な企業家的精神と、緻密な打算といつたものを、古くは角屋七郎兵衛、河村瑞軒、三井八郎兵衛から伊藤小左衛門、川村元卿、御本平幸吉、原田二郎等の系譜に見え、これも興味深い。なお挙げられた人物を見ると、女性を極めて乏しいことも注目される。これは封建時代が女性を閉込めて活躍させなかつた誤だから当然の話だが、70名の郷土人物の中に僅かに山田りと、慶徳麗文、慶光院清順、木村小角がのぞいてゐる。適当な人物がなしかと、県史、郡史類を探してみても、女性で表彰されたり金一封をもらつたりした女子師範の事績といふものも概ね、今日的な感覚では本人の人權を無視した全く忍従の生活のようで、一読裏に暗い気持ちにならされる類いのもので、取り立て、挙げるに及ぶまい。伝説めくが古代では弟橘

暖なども、一応郷土人物として挙げるべきか。又、昭和17年7月、溺れる3女生徒のうち2人を救つて、3人目に力つきて溺死した若き保田清子訓導などはどうしたものか忘れられていたが、これはぜひ入れてみたい気がする。

◆三重県郷土人物のまばるもの(得票順)

- 1、御木本幸吉
- 2、尾崎行雄
- 3、本居宣長
- 4、松尾芭蕉
- 5、角屋七郎兵衛
- 6、河村瑞軒
- 7、稻葉三右衛門
- 8、谷川士清
- 9、松浦武四郎
- 10、藤堂高虎
- 11、大黒屋光太夫
- 12、沼波弄山
- 13、竹川竹斎
- 14、蒲生氏郷
- 15、平田鞠貞
- 16、森有節
- 17、野呂元丈
- 18、平忠盛
- 19、三井八郎兵衛
- 20、伊藤小左衛門
- 21、加納道盛
- 22、斎藤拙堂
- 23、荒木田守武
- 24、西村彦左衛門
- 25、浜田国松
- 26、松平定信
- 27、二井理兵衛
- 28、米山宗隆
- 29、出口延佳
- 30、西島八兵衛
- 31、真盛上人
- 32、佐々木惣吉
- 33、北島親房
- 34、夢窓国師
- 35、結城宗広
- 36、村上島之丞
- 37、松岡道右衛門
- 38、足代弘訓
- 39、岡山友清
- 40、辻越後
- 41、山中忠左衛門
- 42、月隱
- 43、川崎宗次
- 44、近藤真琴
- 45、九鬼嘉隆
- 46、川崎克
- 47、真慈
- 48、滝川一益
- 49、鷹森藤太夫
- 50、匹田市左衛門
- 51、福山左源治
- 52、岡野石圃
- 53、韓天寿
- 54、米山宗琦
- 55、中川九左衛門
- 56、松井孫右衛門
- 57、川村元助
- 58、伊藤伝七
- 59、前川定五郎
- 60、天香文石エ門

- 61、土井八郎兵衛
- 62、山田リと
- 63、松本宗一
- 64、村山龜平
- 65、慶徳麗文
- 66、慶光院清順
- 67、木村小舟
- 68、飯沼惣奇
- 69、藤波氏富
- 70、諸戸清六

巡で話は前後するが、私が何故こんな調査を試みようと思いつたかと云つた動機にも若干ふれてみる必要がある。それは戦後の歴史教育の傾向が一般に人物を軽視して、時代の流れや社会をつかませるのだといつたことをねらいとしながら、素外それが果されなくて、児童にとつてはあまりおもしろくもないものを押しつけられている感なくもない。偶々、志摩郡波切小学校の、一九五四年版の教育課程と、その教育課程の根拠となつた「児童の実態調査」編を見るに及んで、興味深い断面を知らされたのである。

すなわちこの実態はなかく、綿密な配意のもとに、適確な資料や調査を配して、児童の現実を鋭くキャッチしている点、敬服されるのであるが、「父母の職業」「児童の希望職業」「児童の憧れている人物」等の集計の表の関連にズレというか、矛盾が見られる。私はこの表が面白いので、よく紹介したのであるが、一応次頁に示してみる。

この表を見てまず気付くことは、父の職業は「漁業」が12名で第一位を占めている。しかも、男子児童の希望職業の表では第一位は「石工」で275名、これは児童の過半数を越えていることがわかる。二位は「大工」、²⁷⁵「漁師」は漸く第三位を保つてゐるに過ぎない。みるがえつて母の職業の欄を見ると、「農業」371名と過半数を占めている。しかも女兒の希望職業では「洋

志摩郡波切小学校

%	数	人名	4
13.6	59	カチンゲル	憧れている人物(女子)
9.9	43	美空ひばり	
7.4	41	松島トモ子	
7.2	40	先住	
7.1	31	野口英世	
4.1	18	ベートベン	
3.4	15	エリカバース	
3.0	13	リンカーン	
2.8	12	エジソン	
2.8	12	お母さん	
2.5	11	皇后陛下	
2.3	10	白鳥みすえ	
1.8	8	白鳥太	
1.8	8	お父さん	
1.1	5	お姉さん	
0.9	4	ヘレカ	
0.9	4	紫看か	
0.9	4	か拾子	
0.9	4	の	
14.9	65		
3.2	14		

%	数	人名	3
13.4	70	野口英世	憧れている人物(男子)
9.8	51	天皇陛下	
8.0	42	エジソン	
6.1	32	鞍馬天狗	
5.0	26	市川右太衛門	
3.3	17	川上送子	
3.3	17	皇太子	
3.3	17	校長先生	
3.3	17	片岡千恵蔵	
2.9	15	二宮金次郎	
2.3	12	御木本幸吉	
2.3	12	猿飛佐助	
2.3	12	町	
2.3	12	リンカーン	
1.9	10	左甚五郎	
1.9	10	左衛門	
1.3	7	吉田浩吉	
1.3	7	高田浩吉	
1.1	6	ターザン	
1.1	6	湯川秀樹	
1.1	6	雲臣秀夫	
1.1	6	長谷川	
0.9	5	龍木又右衛門	
0.9	5	元長	
0.8	4	徳川	
0.8	4	大友柳太朗	
0.8	4	お父さん	
0.8	4	お母さん	
14.5	76		
1.1	6		

%	人員	職種	希望調査
52.7	275	石大漁運會士船水産加工	1、希望職業(男子)
13.2	69	工師手員工員	
6.7	35	専社	
5.4	28	運會士船	
5.0	26	水産加工	
3.1	16	専社	
1.9	10	水産加工	
1.4	8	水産加工	
1.2	6	水産加工	
1.2	6	水産加工	
1.0	5	水産加工	
0.5	3	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
0.3	2	水産加工	
3.4	18	水産加工	
0.5	3	水産加工	

%	人員	職種	希望職業(女子)
51.4	224	洋裁縫生員	2、希望職業(女子)
20.2	88	洋裁縫生員	
10.3	45	洋裁縫生員	
3.6	16	洋裁縫生員	
1.8	8	洋裁縫生員	
1.8	8	洋裁縫生員	
1.3	6	洋裁縫生員	
0.7	3	洋裁縫生員	
0.7	3	洋裁縫生員	
0.7	3	洋裁縫生員	
0.5	2	洋裁縫生員	
0.5	2	洋裁縫生員	
0.5	2	洋裁縫生員	
0.5	2	洋裁縫生員	
4.4	19	洋裁縫生員	
0.9	4	洋裁縫生員	

んで才11位という点など、一寸考えさせられるところである。「希望職業」と「憧れている人物」との関連では、男児の野球選手5名と川上送手17名との関連、又文児の希望職業「先生」45名が、憧れている人物でもやはり「先生」が40名あるのと略々一致する。こうした若干の例外はあつても、「憧れている人物」には、希望職業に見るような現実性が余外乏しいことに気付くであろう。というよりは、児童自身にとつても、こうした人物名を聞かれて戸惑つた様子がわかるよう

らわれているといったのは、映画・ラジオなどマス・コミの影響であろう。扱はなしのこの地域の南国的な明るい子供気風といつたものがわからぬでもないが、この地域の子供ならば、一応相当数のものが挙げてもよい筈の御木本幸吉(今日の調査では県下社会科教師たちは、郷土人物の才1位に推している)が、ようやく猿飛佐助と並

うでは余外無邪気に当時の教育の考えさせられる一面を露呈しているといえなくもなからう。憧れている人物の中に、男児ではチャンバラ劇の俳優が六名、女児に歌手が三名挙げ

な気がする。とも角この調査項目から、当時のこの学校のウィークポイントとも言つと聊が大袈裟かも知れないが、何らの問題点であると言えよう。もつとも、だからと言つて「憧れている人物」が、御木本幸吉などがもつと上位にあつて、望ましい歴史的人物がすうりと整頓されて、聖の如く現れたら、理想的教育が行われているなどは毛頭思つていないのだが、。、。ともかく、この調査の表は今日の教育の一つの断面を示すものとして興味があるものである。

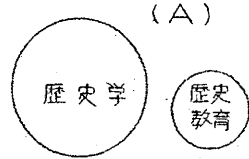
上述のようなことも動機の一つとなつて、標記のアンケートをとつてみようと思つたのだが、この調査のねらいは勿論標題のように、郷土人物の取扱いを通じて「社会科教師の意識」を探るにあるが、そのことから、将来「郷土人物資料」を編む際の人物を、現場の意見によつて発掘してみたいといつた願いを併せ持つていた。更に又、私の聴講学生に現場学習の一方途として、社会科教育の現場との接融をねらつたので、いわば一石三鳥だつたと云える。

ところで、この調査の報告を終えんとするに當つて、最後に郷土人物の取扱ひ、乃至は社会科教育における人物の取扱ひに肉する私の希望といつたものを若干申し添えてみたい。

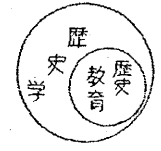
社会科教育に於て人物を取扱う重要性は、最近再認識されて来たように思われる。児童が一般に欲求する人物が、マスコミの跳梁に放任され、興味本位の否んだ人面観や、浅薄的英雄主義を植えつけ、学校教育がそれにほとんど内心を示さないといふことは望ましいことではない。戦前の歴史教育が人物中心で

天皇奉仕の教育を推進したことへの反動として、努めて人物を出さない歴史教育が新しいものであるかの如く誤信させる傾向が一時あつたことは事実である。しかし時代の流れや、社会の発展をつかませるにしても、適切な人物を仲介としてそれが可能である。児童の発達段階に即して、こうした配慮の必要などは自明である。人物取扱ひの重要性は象人認めるところとしても、要は如何なる人物を、如何に扱うかという点に問題は帰着するのである。こゝに「選択」の問題が出てくる。どんな人物をどんな角度から取扱うかという選択の基準である。單元学習が網羅主義でなく、重点主義のものである以上、当然この選択の場というものが必要になる。郷土人物に關して望ましい人物、望ましいがささる人物を向うたのも、かゝる立場からである。望ましい人物には、比較的問題もなく答えた人々も、さて望ましくあらざる人物となると、小首をかしげ、人物が歴史的・社会的所産なるが故に、必然的な時代の子として、特に好ましくらずとするのは當らないと、否定的であるのは先に述べたところである。これは充分その根拠を持つてゐる。すなはち歴史的発展的過程に於て人物を捉えたのである。歴史学に於ては「発展」が選択の基準である。歴史という強靱な胃袋の中に作用する発展という酵素は、凡ゆる不消化な食物をも自家の栄養として摂取する逞しい独特の力を有している。つまり歴史は、一切のものをも否定せず、肯定して、おのがじし処を得じめるといつた達人の境涯に似たものを持つてゐる。ところで、戦後我が國の社会科発生の基盤に於て、歴史性の否定乃至欠如が、我が國社会科教育の悲劇性の根柢をなしていることを、事ある毎に主張

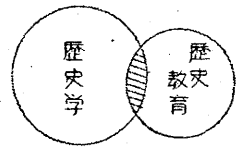
してきた垂考にとつて、社会科教師の間に漸次、歴史的理解が滲透してきたのは、まことに喜ばしい次第である。さて、この



(A)



(B)



(C)

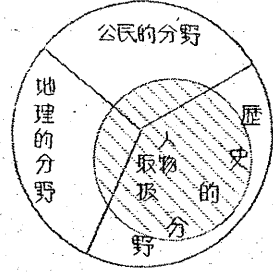
「歴史学」と「歴史教育」との関連如何と見ると、戦前の歴史教育は、歴史学

とは無縁の科学性の乏しいものであつた。図示すればA図のようにならう。

戦後になると、歴史学と歴史教育の一致面が強調され、歴史学を小型にするか、単純化したものが歴史教育であるとし、いわば、この面からは歴史教育は歴史学の応用であるとするような立場で、B図のようになるであろう。これは科学性の面で歴史学に一致し、歴史教育の過去の悩みを解消させた点では、確證的である。しかし歴史教育は、歴史学を小型にしたものかと言へば、決して単純に首肯できないであろう。既述のごとく歴史学では「発展」という意味の基準があつて、その枠組に束縛されるものは、一切肯定される運命にある。児童生徒を対象とする歴史教育（というより一層正しくは社会科学習における歴史的分野の学習とすべきであろう）の面では、「科学性」へ歴史に於ける科学性は発展の概念に共通するに於ては歴史学と共鳴しながら、歴史学とは全く異つた範疇を独自に有していると思える。削ればC図の図式が掲げらるであろう。えが歴史教育の立場

でないかと思ふ。「好もしくらざる人物」を否定する立場はB図の様式だと云えよう。

次に社会科学習に於て人物を取扱う場合を考へてみる。



社会科学習

上図の如く社会科学習の分野を歴史的分野、地理的分野、公民的分野に考へるとしたら、その分野は必ずしも等分のものでなく、素外に狭ある図にならぬかと思ふが、こゝで人物の取扱いをする場合、歴史的分野に相当ウエイトがかけられるが、なお地理・公民の二分

野を包含するであろう。そこには当然歴史的分野の学習により養われるべき態度とか能力の、要素的なものゝ因てを被らない。それは、又別個の立場の歴史的な学習を重ねることによつて被るべきであろう。しかしとも角、人物というスコップを出すことによつて、三つの分野にまたがる社会科学習（敢て歴史学習とは云わない）が、渾然と行われるのではないか。これを何か狭い範囲の歴史学習に無理に囚込めようとして、人物の学習では歴史的な学習が歪むといつた点を憂うとすれば、それは聊か捉われた考え方と云うべきであろう。私は従来の歴史教育の果して未だ功績を認めるに吝かでない。それらうちこわそうというのでなく、その足らざるをおおきなたい意味での提案である。いさゝかこたく、に凝り固つた歴史教育の概念を、少々うちこわしただけである。

「歴史」は、本末如何にして生れたかを考へてみる。それは人

向を生々とかみだたい。そんな欲求から生れたのではなかつたか。我とは何ぞや?・といった自覚に発して、我と同じ姿をした他の人向、歴史的人物に向けられ、人向とは何ぞやと具體的につかみだたい。そして結局は、我如何に生くべきやと自らに問はずる人向探究に「歴史」が生れたとすれば、一層グイウイドに人向を採るにはどうしたらよいか。我々はもつと「歴史破りの歴史」と言つたものを考へてみる必要がありそうである。勇猛心を振つて型にはまつた歴史教育を打破する冒險を敢てするなら、巢外、空念仏に終りそうだった歴史教育の理念が、活然と自身に迫つて来るのを巢外感得するかも知れない。彼の紀元132世紀の向に生きた、ヘレニズムのギリシヤ人「フルタルコス」が著した「並行列伝」(い、わける英雄伝)の、アレクサンドロス大王伝の冒頭に、次のような事を述べている。

「余の試みるところは、伝記を書くのであつて、歴史を記すのではない。それ故に伝記作者という立場から見れば、大事業や大戦争が必ずしも人向の心の中にある善と悪とを明瞭に示すとは限らない。むしろ些細な事件、ふとした言葉の末、一つ二つの冗談などの方が、嫉妬隔れた話や廃の山を築いた大台戦の記述よりも、より適切に、人向の性格や傾向などを現わすからである。つまり画家にたとえて言えば、一枚の肖像画を描こうと思ふときには、人向の足や胸や手をそう細かく写すよりも、小さい部分ではあるが顔だけに全力を集中して、顔の形や顔の線や顔の表情などを詳しく出すようなものだ。それ故に伝記作者たる私の仕事は、人向個人の心や魂の特徴を細かく記すことであつて、その人向の昌した大戦争や

大事業のことは、これは歴史家に譲るのである。……」と。
 生活綴方などが、社会科学習の隙間を埋めるように、郷土又は民族の歴史的人物に、かゝるフルタルコスの手法でスポットライトをあてるなら、存外、歴史教育の隙間風を遮断する役割を果すのではないかとと思われる。

以上不充分下ら過日の東京学大世田ヶ谷分校における日本社会科教育学会、また三重大学における三重社会科教育研究会の発表を中心にとめてみた。
 (昭和34・6・19午前2時記)